

少しだけ深く読み解く

# 「詩劇としての能」01 『井筒』のすべて

京都芸術大学 藝術学舎 二〇二二年度春季  
舞台芸術研究センター提供連続講座

担当講師 **天野文雄**  
(京都芸術大学舞台芸術研究センター所長)

七〇〇年の歴史と変化を通して学ぶ、  
「現代に生きる能」の魅力

現在、内外の芸術界から熱い視線が注がれている能楽（能と狂言）ですが、その長い歴史のゆえに、能楽についてのわたしたちの理解はいささか表面的で、画一的なものになっています。それは今にはじまったことではなく、四〇〇年は昔にさかのぼる現象ですが、この講座では、本学の春秋座で上演されてきた能のなかから1曲をとりあげ、その映像を用いて、能の作者、上演史、素材、テーマ、趣向、演出、変化、逸話などについてじっくりと学び、「能」という舞台芸術の特色と魅力を伝えたいと思っています。今回は『井筒』をとりあげます。これから能を知りたいと思っっている方、能についてももう少し深く知りたいと思っっている方の受講を歓迎します。なお、毎回、最後の30分を質問にあて、5回のうち1回は演者をお呼びします。

## ■オンライン講座

(遠隔WEB受講・受講生登録制)  
講座番号 G2211105

■受講料(全5回) 1万8千円

■定員 二〇〇名

※各回19時00分～21時00分

第1回	5月11日(水)
第2回	5月25日(水)
第3回	6月8日(水)
第4回	6月22日(水)
第5回	7月6日(水)

お申込みはこちら  
(WEBのみ)



お申込から  
受講開始までの流れ



## 第1回 5月11日(水)

### 『井筒』を理解するための基礎

この回では、まず令和2年2月に春秋座で上演された『井筒』の映像をかんたんに紹介して、その概要を理解したうえで、『井筒』の成立時期、作者世阿弥の評価、その後の上演史、現代における『井筒』評価などについて説明し、さらに参考までに、『井筒』にかぎらず、能を鑑賞／読解するさいに講師が留意していることを紹介します。それを受けて、この回では、『井筒』の典拠は『伊勢物語』そのものではなく、『伊勢物語』の中世における注釈であること、さらに『井筒』の舞台が大和の在原寺なのはなぜか、その在原寺は当時すでに廃寺となっていたというのが近年の説ですが、そう考えてよいか、といったことについて考えます。

## 第2回 5月25日(水)

### 『井筒』の詞章をめぐる

この回では、音楽(謡、囃子)、舞(舞、舞踊的な所作)とともに能の重要な構成要素である言葉(謡曲、戯曲)を話題にしますが、具体的には、掛詞、縁語、序詞、和歌、漢詩を多用した文体についての説明になります。そうした修辭が「詩劇としての能」の源泉になっていることにも触れたいと思います。また、同じ『井筒』でも流儀によって詞章が異なる場合があることを紹介して、どれが本来の文句で、どれが後代に改められた文句なのかを考え、さらにその違いが『井筒』のテーマ理解にどう影響するかを考えます。ここでは資料として『井筒』全体の詞章を現代語訳付きで配布します。

## 第3回 6月8日(水)

### 『井筒』の演出をめぐる

この回では、後ジテの紀有常女の霊が業平の形見の装束をまとって(つまり男装で)登場することについて考えます。この演出については、業平の霊が憑依したとする見方が比較的多いのですが、はたしてそう考えてよいのかどうかも考えてみたいと思います。その場合、序ノ舞の前の「昔男の移り舞」という文句をどう考えるかも関係してきます。また、序ノ舞のあと、紀有常女の霊が井筒の底を覗いて、その水に映ったわが姿を見る印象的な場面の演出についても考えてみます。ここでは主に序ノ舞とその前後の映像を見てもらいいます

## 第4回 6月22日(水)

### 『井筒』一曲を通して読む

この回では、これまでの講義で得た理解のうえに立って、2回目に用意したテキストによって、『井筒』一曲を趣向や修辭や演出にも留意しながら読み、最終的に『井筒』が描こうとしていることを考えてみます。これには対訳で掲載されている現代語訳も役立つはずですが、素読するだけなら20分もかからないテキストですが、そこに紀有常女という存在を超えた、懐旧、恋慕という普遍的な感情がいかに深く描かれているかを確かめたいと思います。それが確かめられたら、この講義の目的はほぼ達せられたこととなります。演者にはこの回か次回にきていただく予定です。

## 第5回 7月6日(水)

### 『井筒』一曲を鑑賞する

この回では、春秋座の『井筒』の映像(シテ、観世鏡之丞氏)を通して鑑賞します。通しといっても、そのまま流すと2時間ほどかかるので、アイの語りの部分などはカットせざるをえませんが、前回のテキスト読解ではわからなかった『井筒』の象徴性や情調についても感じるところがあるだろうと思います。残った質問の時間は、この回だけでなく、5回の講義全体についての質問でもけっこうです。

写真：2020年2月11日(火・祝)「春秋座-能と狂言」より  
能『井筒』観世鏡之丞 撮影：井上嘉和



お申込みはこちら  
(WEBのみ)



お申込から  
受講開始までの流れ

※春季講座情報は2022年3月1日(火)に公開されます

- 受講料(全5回) 18,000円 ■ 定員200名
- お申込み受付期間  
2022年3月8日(火)13:00～2022年4月30日(土)13:00
- お問い合わせ  
京都藝術学舎 tel.075-791-9124 受付時間10:00～16:00(月～土)  
<https://air-u.kyoto-art.ac.jp/gakusha/>